

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程前期課程1年	合崎 京子	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科	灘光 洋子	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題名	発達障がい者の会話時における、「特徴」の共通性		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程前期課程1年	合崎 京子	
研究期間	2013 年度		
研究経費	(支出金額) 169 千円 / (採択金額) 169 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、特性の一つに、「コミュニケーションの障がい」(Wing, 1997)が挙げられており、障がいのない「定型発達者」によるコミュニケーションの仕方と比較し、語彙が豊富で文法にも強いけれど、コミュニケーションがぎこちないと言われている、発達障がい者がどのように初対面会話において実際の会話の中で起こるコンテキストの変化や対話者を認識し、自己をどのように表出しているかという点について分析、考察を行っていく。そして会話の社会的な構造と当事者の解釈の枠組みの差異に焦点を当てることにより、その発話の特徴を明らかにし、発達障がい者のコミュニケーションを理解する一助となることを目的とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[発達障がい] [コミュニケーション] [フレーム]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1) はじめに

発達障がい者のコミュニケーションの異なり方を調べた研究は、文書完成法検査やロールプレイ等では行われているが、自然会話をデータとしているわけではない。しかしながら通常コミュニケーションというものはテストや実験といった場で行われるものではなく、普段の何気ない生活の中で発生することがほとんどである。今回はこの点に着目し、自然会話をデータとする。特に、非言語行動、および語彙使用のストラテジーに着目し、今この瞬間に起こっていることを適切に解釈できるように導くという「会話フレーム」(Tannen, 1993)に彼らがどのように対応しているか分析を行う。

2) データ

本研究は、東京都内にある発達障がいの当事者会で行われた 2 名の研究協力者による 15 分間の会話をデータとし、分析を行った。発達障がいの疑いの高い T と、発達障がいと診断済みである C は、この研究協力を通じて知り合った。彼らは、「会社の上司に対する不満、愚痴をいう」というテーマのもと、会話を行っている。

3) 会話事例と C に注目した分析

データ 1.

- 8 C: え:とこのみなさんからはよく C と > よばれていますく
 9 : (1.0)
 10 T: あ(.)
 11 C: はい
 12 T: はい (1.0)
 → 13 : [C さん
 14 C: [ではいそうです
 16 : (0.9)
 17 T: え:(1.6)え T です.

データ 1 は C と T がお互いに自己紹介をしている場面の一部である。二人はその場で考えるような時間もなしにタイミングよくハンドルネームを名乗っている。このことにより、C、T 両者とも当事者会に属している、発達障がい者やそれに準じた当事者同士であるということが指標されている。また C の「このみなさんからはハンドルネームで呼ばれている」(8 行目)という発話に対して、T は C のハンドルネームで呼びかけている(13 行目)ことから、T 自身が「このみなさん」であるとの自覚が読み取れる。この 18 行全体のやり取りからは、初対面でありながらすでに当事者会の規範を共有しているという「当事者会における会話」というフレームが構築されていることがわかる。そしてこれから始まる会話は、既に通常の初対面会話とは異なったレベルにあり、このあと続く会話はそれを基盤にしていくものだということが示唆されている。

この後の会話における C の発話には、「あまり」や、「なんていうのか」というあいまいさを示す語彙を多く用いられていたため、言及したいことがわかりにくかった。しかし、それぞれの語りを、第一に、「ので」という語句を使用し、自分の主張の裏付けとなる根拠を述べ、その後自身の現在の状況や考えを続け、結論に至るという形式だった構成の語りに行っているという発話のデザインからはあいまいな表現や言いよどみ、中断の多い C の発話の中にあっても、C の自分の主張に対する絶対的な価値観が表現されている。さらに

研究成果の概要 つづき

そのような価値観は、C が発話ピッチを急に上げ、まくしたてるように話していることにも表れ、C が自身の考えが簡単にならないということを表現しようと試みていたとも考えられる。また、C が自分の経験を語る中で、承認要求の機能のある終助詞を多く使用したり、発話の区切れにおけるイントネーションや視線の投げかけで同意を求めていることから、T が同じフレームの下にいると解釈していることが見受けられた。しかしこれらの箇所では T は C に対する視線を外しており、T はあいづちを打つこともなかったため、C が期待したフレームの上では会話していないことが徐々に明らかになる。

データ 2.

397 : >わたしというかくあの私が例えいてもいなくても

398 : 別にその人の人生にあんまり関(.)係がないじゃないですか

400 T: そうですね=

401 C: =はいそれで-別にそこでその相手もそこまでそれほど私に興味がない(0.6)

402 : はず(0.6)

403 : だとおもうんですね?

データ 2 は、会話開始後、13 分後の場面である。この場面で C は何かを説明しようとする場面で、自分の説明に相手がついてこられることを確認するというコンテキストで使われる「じゃないですか」(398 行目)をいったん上昇して下降するイントネーションとともに使用し、更に、T に対し、視線を投げかけている。このように自分の意見への相手の強い同意を促しているのである。しかし、視線を投げかけられた T は C を見ておらず、また、続く「そうですね」の応答はいったん上昇して下降するとイントネーションで発せられ、また持参したマスクをいじっているという行動からは、この発話は同意としてのあいづちではなく、単なる受容としての応答であると捉えられることが可能である。続けて C が自論をさらに押し進め、402-403 行目で、① 予定や推定など、きまりや確かさの見込みを表す用法のある「はずだ」、② 丁寧語「です」、③ 話者が聞き手に同一の認知状態を待つことを積極的に求める態度を示す標識としての意味もある同意要求の終助詞「ね」を上昇イントネーションと共に用いている。② の丁寧体で発話内容の印象を緩和しつつも③ と先行する① が共起することにより、自分の発言の命題の相手への押しつけがましさが醸しだされているとも解釈できる。

データ 1 に見られた「当事者会の会話」という共感を得ることが期待されるフレームからのズレが 10 分程会話する中で生じているが、C が自分の主張をなおも続けることから、双方の会話フレームに対する解釈が異なる様子が明らかとなった。

4) まとめ

以上では、実際の会話の中で起こるコンテキストの変化に着目し、会話参加者が自分の自己をどのように表出し、また相手をどのように認識し対処しているか記述を行った。そこからは、両者は同じ場面に対し同質のフレームを構築していないが、彼らの発話内容及び語彙使用のスタイルに変化が見られることはなく、双方の会話フレームに対する解釈が異なる様子が示唆された。今後は、研究協力者への回顧インタビューを通し、彼らがこれらの会話場面をどのように解釈していたのかについて、より詳細に把握することを予定している。また、発達障がい者と、障がいや当事者会に対する知識のない者の会話を収録の上、フレームの構築及び解釈のされ方について同様の分析を行い、本データの分析結果との間に差異が見られるか、また差異があった場合どのような部分が異なるか比較を試みる予定である。

(引用文献)

Tannen, D.(Ed.), *Framing in Discourse*. Oxford: Oxford University Press.

Wing, L. (1997). History of ideas on autism: Legends, myths and reality. *Autism*, 1 (1), 19-20.

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 合崎京子 (2014) 「発達障害者による会話フレームの構築と共有 - 当事者科医における初対面会話の談話分析を通して」『第39回春期セミナーハンドブック』 p.25

合崎京子 (2014) 「自閉症スペクトラムを持つ人の会話分析」『立教・異文化コミュニケーション学会第11回大会発表論文集』 (in press)

④ 合崎京子 (2014) 「発達障害者による会話フレームの構築と共有 - 当事者科医における初対面会話の談話分析を通して」 (3月19日, 於: 立教大学)